

中川李枝子『いやいやえん』論 On Nakagawa Rieko's *Iyaiyaen*

藤井 亜希子

FUJII Akiko

要旨

中川李枝子のデビュー作『いやいやえん』は、数々の賞を受賞するなど高く評価される一方、教育的すぎる、或いは子どもの観察記録に止まるとの指摘もなされてきた。本稿では、その物語性を明らかにするために、初出である同人誌『いたどり』版からの改稿をふまえ、全体の構成と各話の特徴を分析することを試みた。改稿により、刊行版『いやいやえん』は、動物等がより生き生きと描かれるようになるとともに、作品順序を一部変え、しげるを主人公とする物語として整えられた。保育園の約束を守らないきかんぼうぶりはそのままに、しげるの行動力は増していく。『いやいやえん』は、その個性のままに成長していくしげるの物語になっている。また、『いやいやえん』各話は、空想の描かれ方によって3つに分類することができるが、後から追加された「やまのこぐちゃん」は、他の6話とは異なる点を持つ。『いやいやえん』は、中川の作家としての出発点であるとともに、その後の作風の変化をも内包した作品なのである。

はじめに

中川李枝子のデビュー作『いやいやえん』は、1962年12月に福音館書店より刊行された。川端康成による推薦もあり¹、刊行の翌年には数々の賞を受賞している²。「幼年童話に新風を吹き込んだ³」作品として高く評価される一方、「教育的、しつけ的すぎるといった評価や単なる保育園の生活記録にすぎないという意見⁴」も当初からみられた。

刊行後間もない時期に、今江祥智は、「園児たちの現実を描く糸が、あやとりのように、いつのまにかファンタジーの世界にひろがり、またいつのまにか現実にもどる……。そのとけあいのみごと」と評価しながら、「この作品にまだ残っている教育臭」を難とした⁵。神宮輝夫は、「子どもの心に対するすぐれた洞察力とゆたかなユーモア」を評価しながら、「観察記録の域に止まる」と評した⁶。この二者による書評は、その後の『いやいやえん』に対する評価の一つの基調となったように思われる⁷。リアルな子ども像がその観察によるものだとしても、「自然発生的な文学の世界⁸」や、「幼児のごっこ・劇活動を物語として再構成したもの⁹」との見方では、物語として『いやいやえん』を捉えることは難しいのではないだろうか。

先行研究には、初期童話の一つとしてその特徴を論じたものや¹⁰、各話を個別に検討したもの¹¹等がある。しかしながら、『いやいやえん』は7つの連作短編からなる作品であり、その各話の舞台や登場人物等も様々に変化する。また本作品に描かれる空想は「ファンタジーの世界と現実のとけあい¹²」や「現実と空想の世界が未分化のままの独特の世界¹³」等と評されてきたが、その描かれ方も各話で異なる。これまでの研究では、本作品の全体構成や、各話がどのような特徴を持つのかについて、十分に分析されてこなかった。つまり、『いやいやえん』の物語性については未だ明らかにされたとはいえないのである。そこで本稿では、『いやいやえん』の成立とその全体的な構成を確認するとともに、空想の世界を形づくる物語の舞台や不思議な出来事といった要素がどのように描かれているかという点に着目しながら、『いやいやえん』を読みたい。

1. 『いやいやえん』成立まで

1) 成立の経緯

中川が作家となる最初のきっかけは、学生の頃にいぬいとみこと知り合い、同人誌『麦』に参加したことである¹⁴。その後、保育園で働きはじめた中川は、いぬいらと「いたどり」を結成する¹⁵。「幼い子のためのお話を書いてみたら？」との同人からのアドバイスを得て¹⁶、3年間の勤務経験をもとに「いやいやえん」6話を書き上げ、これらが『いたどりシリーズ』第3号で発表された。そして、この6話に、雑誌『母の友』に掲載された「やまのゴグちゃん」を加え、加筆修正のうえ刊行されたのが『いやいやえん』である。

『いたどりシリーズ』第3号（以下「いたどり版」）から『いやいやえん』（以下「刊行版」）成立までに発表された中川の作品は下記の通りである。

- ① 「いやいやえん」『いたどりシリーズ』(3) 1959年7月（絵：大村百合子）
- ② 「いやいや園¹⁷」『日本児童文学』5(7)(42) 1959年8月 50-57頁
- ③ 「いやいや園¹⁸」『新日本児童文学選』あかね書房 1960年 28-59頁（絵：大村百合子）
- ④ 「ももいろのキリンのキリカ」『いたどりシリーズ』(6) 1961年4月 42-51頁
- ⑤ 「くじらのうち」『母の友』(94) 1961年7月 72-76頁（絵：中川宗弥）
- ⑥ 「さちこちゃん」『母の友』(95) 1961年8月 64-69頁（絵：大村百合子）
- ⑦ 「しげるのかさ」『保育の友』9(9) 1961年9月 24-25頁（絵：原徳太郎）
- ⑧ 「やまのゴグちゃん」『母の友』(97) 1961年10月 65-69頁（絵：大村百合子）
- ⑨ 「ももいろのきりん」『母の友』(99) 1961年12月 67-89頁（絵：大村百合子）
- ⑩ 「王様になったしげる」『日本児童文学』8(2) 1962年2月 26-29頁
- ⑪ 「かえるのエルタ」『母の友』(104-116) 1962年4月-1963年3月（絵：大村百合子）
- ⑫ 『いやいやえん』福音館書店 1962年12月（絵：大村百合子）

いたどり版の翌月には、『日本児童文学』に、新人作品としてうち2話が掲載された¹⁹ (②)。そして翌年には、早くも『新日本児童文学選』に、宮沢賢治や新見南吉の作品と並んで、「いやいや園」1話が掲載されている²⁰ (③)。

①いたどり版から⑫刊行版までの間には、同じしげるを主人公とする⑤⑦⑧⑩が書かれている²¹。このうち、チューリップ保育園を舞台とする⑧「やまのゴグちゃん」のみが⑫刊行版に収録された。なお、⑥⑪にはしげるは登場しないが、主人公はチューリップ保育園に通う設定になっている²²。

⑫刊行版『いやいやえん』について、①いたどり版と比較すると、⑫刊行版では、⑧が加えられるとともに、文章表現²³や挿絵²⁴を含め、さまざまな変更がなされている。⑫刊行版は石井桃子の指導を受けながら、何度も書き直したうえで出版された²⁵。ここではまず、①いたどり版と⑫刊行版との違いについて確認しておきたい。

2) いたどり版からの変更内容—主人公と作品順序

中川正文は、いたどり版からの改稿について、これらの「異同が示すなかに、作家・中川李枝子の出発点の秘密が、かくされている²⁶」と指摘した。はじめに、どのような改稿がおこなわれたのかを主人公と作品順序から確認しておきたい。

まず主人公について、いたどり版の冒頭には、刊行版にはない「これからの六つおはなし〔原文ママ〕

は、チューリップ保育園の子どもたちの、おはなしです。」(2頁)という一文が置かれている。刊行版の出版社による紹介には「元気だけど、わがままできかんぼうの保育園児・しげるが主人公のお話集²⁷」とある。この刊行版においては、よりしげるにフォーカスされていることが、第1話で削除された箇所からも確認できる。刊行版では、しげるが忘れた17の約束が列挙された後、「こんなにたくさんわすれましたが、ものおきにいくまえに、みんなおもいだしました。」(9頁)と締めくくられるが、いたどり版では以下のような結末となっている。

●いたどり版「チューリップほいくえん」

十七かいも、やくそくをわすれたのは、しげるではありません。

チューリップ保育園の子どもたちは、みんな、わすれてばかりいます。

でも、みんなは、なまえをよばただけで、

「ああ。そうそう。」

と、思い出すのです。

やくそくを思い出すために、わざわざ、ものおきまでいった子どもは、一人も、いないのです。

(いたどり版6頁)

みんなも約束を忘れてばかりいるという箇所が刊行版では削除され、しげるのやんちゃぶりをより際立たせている。

また刊行版第2話「くじらとり」では、しげるがカメラを持ち記念撮影をするが、いたどり版では下記のようになっている。なお、引用文中の下線はすべて引用者による。

●いたどり版「くじらとり」

しゃしんきを、首から下げた人が、出て来ました。

「しゃしんをとりますから、『ぞうとライオン丸』の皆さん、並んで下さい。」

みんなは、くじらをまん中にして、並びました。

「わらって、わらって。ーハイ、とりました。次に、おむかえの方たちもおはいいり下さい。」

ほしぐみとばらぐみの子どもたちが、並びました。

しげるは、一番に、とんで行って、くじらのとなりに、立ちました。(いたどり版16頁)

刊行版では、カメラマンが姿を消し、写真撮影はしげるの役割に変わっている。他にも、刊行版「山のぼり」では、冒頭の先生と約束をする場面で「しげるもよくわかったしるしに、りょう手をあげました」(113頁)のように、しげるの反応が2か所で追加されている。全体として、刊行版では、主人公しげるにより焦点が当たるようになったことがわかる。

次に、作品順序について確認しておきたい。いたどり版と刊行版の作品順序は以下の通りである。

いたどり版

1. チューリップ保育園
2. くじらとり
3. ちこちゃん
4. やまのぼり

刊行版

1. ちゅーりっぷほいくえん
2. くじらとり
3. ちこちゃん
4. やまのこぐちゃん

5. いやいやえん

6. おおかみ

5. おおかみ

6. 山のぼり

7. いやいやえん

刊行版では、追加された「やまのこぐちゃん」が第4話に置かれ、「おおかみ」「山のぼり」「いやいやえん」の順序が入れ替わっている²⁸。なぜ、配列順を変更したのだろうか。まず、刊行版で最終話となった「いやいやえん」の内容について、確認してみたい。以下は、しげるがいやいや園から帰る場面である。刊行版では、しげるは、もういやいや園に来ない理由として、おばあさんに「ちゅーりつぶほいくえんのほうが、ずっとおもしろいよ。」(176頁)と答えるが、いたどり版では下記のようになっている。

●いたどり版「いやいやえん」

「また、あしたもおいで。」

と、おばあさんが、いいました。

「もう、来ないよ。」

と、しげるは、小さい声でいいました。

「へえ。いやいや園は、きらいかい。」

「ぼく、もう、赤い自動車、すきなもの。おべんとうだって、すきなもの。」

おばあさんはがっかりしました。

「そうかい。みんな、すきなら、しょうがないね。さようなら。」(いたどり版 47頁)

刊行版では、ちゅーりつぶ保育園のほうが面白いという理由に変わった。さらにこの後、お母さんにもちゅーりつぶ保育園のほうが面白いと話す場面が追加されている。いたどり版の最終話「おおかみ」の文中にも、子ども同士の会話の中で、しげるが「チューリップの方が、いいもの。」(53頁)と言う箇所があるものの、刊行版ではちゅーりつぶ保育園の面白さが強調され、いやいや園との対比がよりわかりやすく示された。

次に、作品順序を見ると、いたどり版では、保育園内での積木遊びである「くじらとり」から始まり、外に出かける「山のぼり」を経て、最終話「おおかみ」では帰宅後のはらっぱが舞台となる。つまり、いたどり版は、現実の保育園生活での室内遊び⇒外遊び⇒保育園から帰った後、というように配列されていたのではないだろうか。刊行版では、例えばしげるが一人で冒険する「山のぼり」が最終話の前に置かれたように、しげるを主人公とする物語へと順序が変更されたものと考えられるが、その点については後述したい。

以上、主人公と作品順序の変更点について確認した。いたどり版と比較すると、刊行版はしげるを主人公とする物語として、長編としてのまとまりをもたせながら整えられたことが見てとれる。

3) 「くじらとり」の改稿

次に、内容上の変化について、改稿が最も多い「くじらとり」を確認しておきたい。「くじらとり」は、中川の勤務する保育園での子どもたちのお話ごっこから生まれ、いたどり版6話の中でも最初にかかれた作品である²⁹。藤本芳則は、いたどり版と刊行版の「くじらとり」には「内容上大きな違いはない³⁰」とするが、くじらが喋るようになったという点だけを見ても、その違いは大きいように思われる。「くじらとり」の改稿について、削除された箇所と追加された描写を見ておきたい。

はじめに、削除された箇所を確認する。刊行版では「ごはんがおわって、かるたをしているうちに、『ぞうとらいおんまる』は、ついにうみのまん中へ出ました。」(23頁)と一文だけになっているところが、いたどり版では、かるた取りから海の真ん中に出るまでの間に、下記の描写があった。

●いたどり版「くじらとり」

かんぱんの上に、まるくすわって、カルタを一かいしました。

次は、ひるねです。

毛布を持って来た船員は、

「こんなにせまくちや、ねられないなあ。」

と、ためいきをついて、頭をまげました。

「うーん。こんなにせまくちや、ねられないなあ。」

と、皆も、頭をまげました。

「すわったまんまでいいよ。」

「すわったまんまで、ひるねか。せつかく毛布をもって来たのになあ。」

「ひざにかけようよ。」

「うん、それがいい。」

毛布を、皆のひざの上にかけました。

「こたつみたいだな。」

と、皆はいいました。

「ひるね、はじめ。一、二、三。」

皆は、目をつぶりました。

「ひるねは、これで、おしまい。」

皆は、目をあけました。

「ぞうとライオン丸」は、ついに、海のまん中へ出ました。(いたどり版 11-12 頁)

子どもの遊びが生き生きと描かれており、削るには惜しい箇所に思われるが、刊行版では全て削除されている。

次に、こどもたちがくじらを捕まえることに成功した以下の場面では、削除された箇所(破線部)と追加された描写(実線部)を確認できる。

●いたどり版「くじらとり」

七人がかりで、くじらの首に、ふといひもをつけて、船の後へつなぎました。

くじらの口から、鉄の棒を、はずしました。

「ああ、よかったー。」

「さあ、ゆっくりと、あせをふこう。」

皆は、ポケットから、ハンカチを出して、あせをふきました。

「さっぱりした。」

いいきもち。」

「さあ、くじらを見よう。」

くじらのからだは、船といっしょになって、波の上を、上ったり下ったりしています。

「あッ。しょっぱい。」

皆は、いっしょになって、さけび、口をおさえました。

黒いせなかから、塩水が、いきおいよく吹き上ったのです。(いたどり版 13 頁)

●刊行版「くじらとり」

みんなで、くじらのくびにひもをつけて、ふねのうしろへつなぎました。

くじらは、まだぼうをくわえています。

「くじらさん、きみのくわえているのは、てつぼうだよ。たべられませんよ。」

と、きやふてんがわらいました。みんなもおかしくてわらいました。

「ちえっ、つまらない。」と、くじらはおこって、てつぼうを口からはなしました。そして、せなかから、しお水をいきおいよくふきあげました。

(中略)

みんなは、しお水をあたまからかぶって、かんぱんの上をにげまわりました。

「あっはっは……」

くじらはせなかをゆすって、大わらいしました。(27-29 頁)

子どもたちが汗を拭く箇所は削除され、くじらの描写が追加されていることがわかる。いたどり版では喋らなかつたくじらは、刊行版では子どもたちと話す存在に変わった。この後、海には嵐がやってくるが、先頭になったくじらが「えへん。」(33 頁)と威張ったり、陸に向かって全速力で泳いだりという描写も刊行版で追加されたものである。

記念写真を撮影する場面でも、いたどり版ではくじらをまん中にして並ぶだけであるが、刊行版ではくじらが子どもたちと一緒に笑う描写が追加された。最後にくじらが帰る場面でも、くじらの窮屈なのが嫌いという性質は同じであるものの、刊行版ではくじらと子どもたちとのやり取りが描かれている³¹。

刊行版のくじらは、くじらの特性(大きさ、潮を吹くなど)は残しつつも、人間味が強い。勢いよく潮吹きをする姿は力強く、「せなかをゆすって」大笑いするところには大らかさが見えて、子どもたちにとって憧れの対象であり、楽しい遊び相手といったイメージに変わっている。

中川正文は、いたどり版からの改稿について、「内容表現とも、やや一般化しようとした」ことにより、「生活記録としての、みずみずしさを、そこなう結果となった」と指摘する³²。確かに、刊行版「くじらとり」では、子どものリアルな生活や遊びを彷彿とさせるような箇所が一部省かれてはいるが、代わりに、子どもたちとくじらの会話が生き生きと描かれるようになった。「みずみずしさ」は決して失われたのではなく、「生活記録」とは異なる新たな物語の中に見出される。子どもたちのお話ごっこから着想されたストーリーは、くじらが人間味のある存在として描写されることによって、より豊かな物語性を持つようになったのではないだろうか。

2. 『いやいやえん』の構成と各話の特徴について

前節では、いたどり版からの改稿について確認した。本節では、刊行版『いやいやえん』について、全体的な構成と各話の特徴から、作品順序の変更が意味するものを考えてみたい。【表 1】は、各話で描かれる内容とその舞台及び登場人物について整理したものである。以下、各話の内容について、登場人物の描かれ方と空想の要素を中心に確認しておきたい。

【表1】『いやいやえん』の構成

	タイトル	内容	舞台	主な登場人物
1	ちゅーりっぷ ほいくえん	導入話。ちゅーりっぷ保育園の先生や約束ごと、しげるが紹介される。	保育園	しげる、先生
2	くじらとり	i ほしぐみの男の子たちが積み木で船を作り、くじらとりに必要なものを用意する。	保育園	しげる、ほしぐみの男の子たち
		ii 海に出てみんなでくじらを捕まえるが、嵐にあい、くじらに引っ張られて帰る。	海	ほしぐみの男の子たち、くじら
		iii 船は保育園に帰り、みんなでくじらと記念写真を撮り、くじらは海に帰る。	海、保育園	しげる、みんな、くじら
3	ちこちゃん	i しげるが机の上に乗る、ちこちゃんのせいにする。	保育園	しげる、ちこちゃん、先生
		ii 先生がしげるにちこちゃんの服を着せると、しげるはちこちゃんとなんでも同じことをしてしまう。		
		iii しげるはもう机に乗りません、と言い先生に服を脱がしてもらい、元気よく帰る。		
4	やまのこぐちゃん	くまの子どもが保育園にやってきて、しげるやみんなと一緒に過ごす。	保育園	しげる、こぐ、先生
5	おおかみ	i はらっぱに散歩に来たおおかみとしげるが会う。	はらっぱ	しげる、おおかみ
		ii おおかみは家に帰り、しげるを洗う用意をする。	森(おおかみの家)	おおかみ
		iii おおかみは忘れ物に気づいて戻り、しげるはお湯で遊び、更に泥だらけになる。	はらっぱ	しげる、おおかみ
		iv 保育園からみんなが帰ってきて、しげるも洗うためにみんなと一緒に家に帰る。	はらっぱ	しげる、みんな
		v おおかみは家に帰り、しげるを洗う用意をする。	森(おおかみの家)	おおかみ
		vi みんなでおおかみを捕まえて、ご褒美にパトカーに乗せてもらう。	はらっぱ	しげる、みんな、おおかみ
6	山のぼり	i みんなで山登りに行くことになり、先生と守らないといけないことを約束をする。	保育園	しげる、みんな、先生
		ii みんなで赤と黄色と橙色の山に登って、りんごとバナナとみかんを食べる。	赤、黄、橙色の山	しげる、みんな
		iii しげるだけ黒い山に入り、鬼に助けをもらう。	黒い山	しげる、鬼
		iv しげるはみんなと会い、一緒に帰る。	帰り道	しげる、みんな
7	いやいやえん	i 赤い自動車が気に入らないしげるは駄々をこねる。	しげるの家	しげる、父、母
		ii 先生がお母さんにいやいや園を教える。	保育園の玄関	しげる、母、先生
		iii しげるはいやいや園で、積み木を取られたり、けんかをしたりしながら過ごす。	いやいや園	しげる、おばあさん、エムちゃん
		iv しげるは迎えにきたお母さんと帰る。	帰り道	しげる、母

1) 第1話「ちゅーりっぷほいくえん」

第1話は、物語全体のイントロダクションになっており、先生やちゅーりっぷ保育園の約束ごとと、主人公しげるが紹介される。ほし組（年長）はいいなあ、とぼらぐみ（年中）のしげるは、「いつもおもって」（2頁）おり、物語内の時間は動いていない。最後に、しげるは「きょう一日で」（8頁）、17回も約束を忘れたことが紹介され、これから物語が始まることを予感させて第1話は終わる。

2) 第2話「くじらとり」

「くじらとり」は、ほしぐみの男の子たちが積み木で立派な船を作ったところから始まる。自分も船に乗りたいしげるの視点を挟みながら、船の命名をしたり、出発の準備をしたりするほし組の男の子たちが描かれる。きゃぷてんが声をかけると船は静かに動き出し、保育園から遠ざかっていく。ちゅーりっぷ保育園から海への舞台転換は、静かに進む。

海は、くじらを捕まえるために出かける冒険の舞台である。くじらとりに出かけるのは、ほし組の男の子だけで、海の場面には、しげるは登場しない。ほし組の男の子たちはくじらを捕まえることに成功するが、空が急に暗くなり、嵐がやってくる。海は、「くろいくも」（30頁）や「きゅうにくらくなった」（31頁）という言葉があらわすように、子どもに危機を与える少し怖さのある場所で、嵐でも平気なくじらの空間として描かれている。

最後は、くじらに引いてもらって帰ってきた船を保育園のみんなが出迎える場面になる。ただし、保育園に戻っても、くじらはすぐに帰るのではなく、みんなで一緒に記念撮影をする。保育園と海が共存しているようなユニークな空間設定である³³。「くじらとり」は、ほしぐみの男の子たちが海でくじらを捕まえる物語であるとともに、しげるを含めた留守番組の子どもたちにとっては、日常の場であるちゅーりっぷ保育園にくじらがやってくる物語でもあろう。その二つの物語が重なり合うことによって、保育園と海が共存したようなユニークな空間を生み出している。

子どもたちはくじらを保育園のプールに誘うが、窮屈なのが嫌いなくじらは海に帰っていき、しげるの「ぼくがいたら、もっと小さいくじらを見つけやっただのになあ！」（41頁）という言葉で物語は締めくくられる。しげるの冒険はまだ始まっていない。

3) 第3話「ちこちゃん」

「ちこちゃん」は、積み重ねられた机の上に乗ってみたいくなる、ちこちゃんの描写から始まる。そこへ、しげるが「ちこちゃん、つくえにのっちゃだめ！」（44頁）と走ってきて、今度は自分が上ろうとする。現実によく起こりそうな子ども同士のリアルなやり取りである。しげるは机に乗ったことをちこちゃんのせいにしたため、先生にちこちゃんの洋服を着せられる。すると、不思議なことが起こる。

ちこちゃんが水をのむとしげるも水をのみ、ちこちゃんがころぶとしげるもころび、ちこちゃんがすきっぷをするとしげるもすきっぷをしてしまいます。

ほんとうは、やりたくないのに、なんでもちこちゃんのまねをしてしまうのです。（59-60頁）

不思議な洋服の効果によって、なんでも真似をするとどうなるのかをしげるは実際に体験する。空想の要素は、しげるに実際にはありえないことを体験させる方向に働いているだろう。「ちこちゃん」では、しげるが悪いことをしても謝れなかったり、人のせいにしたたりするといった子どもらしい姿を見せ

ている。

4) 第4話「やまのこぐちゃん」

「やまのこぐちゃん」は、こぐまが保育園の生活を体験する物語になっており、舞台はちゅーりっぷ保育園である。しげるは、「ちやいろいけの、ふとった小さいくまの子ども」(67頁)であるこぐを保育園で出迎え、みんなに紹介する役割を担う。ただし、以降は主にこぐの視点から物語が進行する。

こぐは、へやの中を、ゆっくりあるいてみました。

てんじょうには、いろんないろのわかざりがさがって、ゆれています。

「わあ、きれい！」

こぐは、うっとりしてしまいました。(70-71頁)

こぐは天井から下がる輪飾りにうっとりし、みんなが描いた絵や、シャツとパンツが入っている戸棚にも感心する。こぐの視点から見ることで、ちゅーりっぷ保育園が新鮮な目で捉えられている。

こぐは、はるの先生に手伝ってもらいながら、保育園の生活を体験する。

みんなで、うたいました。

こぐは、うたをしらないので、「むーむむ、むーむー」と、いってました。

こぐは、みんなのまねをしました。

おりがみをしました。

こぐは、おりがみができなくて、はるのせんせいに、おってもらいました。

手をあらいました。

こぐは、三十ぷんも、手をあらっていたので、おなかまでぬれてしまいました。はるのせんせいが、たおるでふいてくれました。(79-80頁)

ここで描かれるこぐは、初めて保育園にやってきた幼い子どものようであり、ふわふわした毛で覆われたお腹が想像されるくまの子どもでもある。こぐは、くまではあるものの、みんなと遊んだり、一緒にお弁当を食べたりするような、人間の子どもの重なる存在として描かれる。『いやいやえん』には、くじらとおおかみと鬼の子どもが登場するが、子どもと一緒に食べるのはこぐだけで、名前では呼ばれるのも、こぐだけである³⁴。

お弁当の時間には、しげるが再び登場するが、「しげるが、たまごやきをくれたので、こぐも、くるみをひとかけ、あげました。」(80頁)というように、ここでもこぐに視点がある。物語は、こぐのお母さんが迎えに来る場面で終わり、最後までこぐの側から描かれている。

「やまのこぐちゃん」は、しげるや子どもたちにとって日常の保育園にこぐまがやってくる物語としての枠組みを持ちながら、保育園で初めての経験をするこぐが描かれる。その二つの物語は完全に重なり合い、こぐの存在自体が空想の要素を担っている。

「くじらとり」で、しげるは「もっと小さいくじら」(41頁)を見つけることを願っていた。このようなしげるの願いをかなえる存在が、保育園で一緒に遊べる「やまのこぐちゃん」であるのかもしれない。きかんぼうのしげるも、自分より小さい³⁵こぐには親切な姿を見せている。

5) 第5話「おおかみ」

「おおかみ」は、ちゅーりっぷ保育園ではなく、はらっぱから物語が始まる。しげるは保育園を休んでおり、一人でおおかみと出会う。はらっぱでは、おおかみとしげるの視点が交互に描かれる。

「こうきたなくちゃ、うっかりたべられないぞ。こんなのをたべたら、おなかがいたくなっちゃう。」
と、おおかみはおもいました。

「でも、せっかくふとって、おいしそうなのに、もったいないなあ、なにか、いいほうほうはないかなあ。

「そうだ！あらって食べるんだ。」

おおかみは、うれしくなって、手をたたきました。

しげるはそれをみて、

「へえ、おおかみが手をたたいている。おもしろいおおかみだなあ。」

と、おもいました。(87-88 頁)

このおおかみは、しげるを食べようとするものの、「このあたたかいのに、赤いけいとじゃけつをきてい」(83 頁)で、野生味は弱い。しげるが汚いので洗ってから食べようと考え、さらに、「きれいにあらったら、ばたーをつけて、じゃむをつけて、ちょこれーとをつけよう。いや、それよりも、とまとけちゅっぷのほうがおいしいかな。こしょうととうがらしをかけて、からくしてもいいな。」(99-100 頁)というように文明化されており、おおかみとしての怖さはかなり軽減されている。

おおかみは、しげるを洗う用意をするため、「森の、おくのおく」(89 頁)にある家に帰る。おおかみの家の場面では、おおかみがお湯を沸かしたり石鹸を用意したりする様子がコミカルに描かれる。

それから、かまどのまえにたって、さんかくの目をつりあげ、こわいこえで、

「もえろ、もえろ、

ぼんぼん、もえろ、

おゆだ、おゆだ、

ぐらぐら、おゆだ。」

と、めいれいしました。

「はい、はい、ぼんぼんもえます。」

はい、はい、ぐらぐらわかします。」

かまどは、あわててこたえました。

つぎに、おおかみは、せんめんじょへとびこんで、

「せっけん、せっけん。」

と、どなりました。すると、せんめんきが、

「ゆうべのおふろでつかっちゃったよ。」

と、いいました。(90-91 頁)

おおかみの家では、おおかみに応えて、かまどや洗面器が喋る。おおかみだけでなくその家も、グリム童話の世界³⁶⁾にまぎれこんだような不思議な空間である。

「おおかみ」の舞台であるはらっぱは、子どもたちの日常の遊び場であるとともに、森のおおかみが

散歩にやってくる場でもある。子どもたちとおおかみの日常が重なり合うはらっぱの奥に、さらに不思議な森の空間が用意され、物語に奥行きを与えている。

物語は、子どもたちがおおかみを捕まえ、みんながご褒美にパトロールカーに乗せてもらうところで終わる。「おおかみ」では、しげるが一人でおおかみに対峙しており、おおかみの目論見に気づかずのびのび遊ぶたくましい姿を見せている。

6) 第6話「山のぼり」

「山のぼり」は、保育園のみんなが山のぼりに出かけようとするところから始まる。山といっても、1番目はりんごの木がある赤い山、2番目はバナナの木がある黄色い山、3番目はみかんの木がある橙色の山、というような不思議な山である。みんなは、先生との「たべるときは、なんでも一つだけ」(111頁)という約束を守るが、しげるだけが約束を守らず、果物を2個ずつ食べてお腹いっぱいになってしまい、黒い山の前で一人になる。

しげるのまえには、くろい山があります。

大きい木がかさなりあっていて、いつも、よるのようくらい、しずかな山です。

あまりしずかで、しげるはこわくなりました。(124頁)

いつも夜のように暗い黒い山には、異世界の雰囲気漂う。しげるは黒い山から聞こえる声にひかれて山に入り、鬼の子どもと出会う。この鬼の子どもは、「かわいいおに」(128頁)であると注釈されるだけでなく、カラフルな服装、パンツだけでなくシャツも着ていることなど、鬼という存在が本来持つであろう怖さは登場時点からほとんどない。つのを持っているところに鬼らしさが残るが、そのつのは、「すこしけずって、水でぬらしておでこにつければ」(133頁)、誰でもすぐに鬼になることができる便利なものである。しげるは鬼になることを断るので実現はしないが、動物とはまた違う、不思議な存在としての鬼を感じさせる設定である。

鬼は、しげるのお腹が少しへこむまでそばにいて、枝の間から引っ張り出してくれ、一緒に大笑いする。なお、鬼と一緒に笑う描写は、いたどり版にはなく、刊行版で追加されたものである。

「山のぼり」は、ちゅーりっぷ保育園から始まり、子どもたちみんなで山に出かけるが、黒い山にはしげるだけが入る。先生との約束を破ったしげるだけが、鬼の子どもと出会うのだ。異世界の雰囲気が漂う黒い山が、しげるの初めての冒険の空間として用意されている。

7) 最終話「いやいやえん」

「いやいやえん」は、家でしげるが駄々をこねるところから始まる。お母さんはしげるをちゅーりっぷ保育園に連れて行くが、なんでも「いやだ。」と言うしげるに対して、先生は「いやいやえんにいらっしやい。いやいやえんなら、しげるちゃんもすきになりますよ。」(144頁)と言い、しげるはいやいや園に行くことになる。

約束が70ぐらいもあるちゅーりっぷ保育園に対して、いやいや園は好きなことをしていい場所である。積み木を取られたり、取っ組み合いのけんかをしたり、みんなが好き勝手にするとどうなるかをしげるは身をもって体験する。しげるは、お弁当の時間に好きなものだけを食べているのを見て羨ましくなり、「いやいやえんは、ほんとうに、いいところ」(174頁)だと思ふものの、最後は、しげるが「あしたになったら、ちゅーりっぷほいくえんにいくんだ。」(177頁)と言いながら、家に帰っていくとこ

るで物語が終わる。

「いやいやえん」の空想の要素は、第3話「ちこちゃん」と同じように、しげるに実際にはありえないことを体験させる方向に働いている。

以上、『いやいやえん』各話の特徴を確認してきた。刊行版『いやいやえん』は、しげるを主人公とするストーリーにするために、いたどり版から作品順序を変えたのではないだろうか。最初は、ばらぐみのしげるは、海での冒険には参加できない（「くじらとり」）。高い机に乗って威張ったり、人のせいに行ったりすることもあるが（「ちこちゃん」）、自分より小さいこぐには親切なところを見せる（「やまのこぐちゃん」）。ここまでは、しげるの個性が生き生きと伝わってはくるものの、まだしげるの冒険にはなっていない。「おおかみ」では一人でおおかみと出会うものの、おおかみを捕まえる主役はほしぐみである。「山のぼり」で初めて、しげるはたった一人で冒険を経験する。つまり、『いやいやえん』は、第1話と最終話によって、ちゅーりっぷ保育園の物語としてのまとまりをもたせながら、くじらとりに憧れるしげる³⁷が黒い山で冒険するまでの物語になっている。そこにみられるしげるの成長は、いわゆる〈良い子〉への成長ではない。しげるは最初から最後まで、エネルギーにあふれた「子どもらしい子ども³⁸」のままである。保育園の約束を守らないきかんぼうぶりはそのままに、しげるの行動力は増していく。『いやいやえん』は、しげるがその個性のままに成長していく物語なのである。

3. 空想の描かれ方

前節では、空想の要素にも着目しながら、各話の特徴を確認した。『いやいやえん』には、子どもとの会話や観察から着想された空想が含まれるが³⁹、それだけで物語が成立するものではない。そもそも遊びの世界では、幼児はすぐに空想の世界に入れるが、その想像力はたちまちばらばらになり、雲散霧消してしまうのが常である。その意味で、『いやいやえん』を「幼児のごっこ・劇活動を物語として再構成したもの⁴⁰」といった見方で捉えるのは妥当ではないだろう。『いやいやえん』は、子どもの想像力のカケラを発端にしながら、物語の舞台と空想の要素をさまざまな形で組み合わせることによって構築された作品なのである。

『いやいやえん』に描かれる空想は、これまで見てきたように各話によって異なる。「いやいやえん」の6話（第1話はイントロダクションのため除く）は、空想の描かれ方によって、以下のように分類することができよう。なお、「現実」という言葉は、中川の勤務していた現実の保育園のことを示す場合があるため⁴¹、本稿ではこれと区別して、物語の中の「日常」と呼びたい。

- ①子どもの日常のなかに空想の要素（出来事）が描かれるもの
「ちこちゃん」「いやいやえん」
- ②子どもの日常とは異なる空想の空間が描かれるもの
「くじらとり」「おおかみ」「山のぼり」
- ③子どもの日常と空想の要素（動物）が一体的に描かれるもの
「やまのこぐちゃん」

①では、空想は子どもの日常に起こる不思議な出来事として描かれる。②の場合は、子どもたちの日常と空想は地続きであるものの（子どもたちと遊ぶはらっぱにおおかみがいったり、不思議な果物の山があったりする）、動物等の住む世界は、少し暗さや怖さを持つ空間である（嵐がくる海、かまどが喋る森

の家、暗い黒い山)。そして、その怖さを軽減するように、そこに住む動物等は親しみやすい存在として描かれる（くじら、おおかみ、鬼）。一方、③の「山のこぐちゃん」の場合は、くまの子どもであるこぐが登場するが、②のような異なる空間は描かれない。舞台はあくまでちゅーりっぷ保育園であり、こぐの存在自体が空想の要素を担っている。言い換えるならば、「やまのこぐちゃん」は、空想を描くにあたって、①のような不思議な出来事や②のような異なる空間を必要としていない。人間の子どものようなこぐまが友だちに近い存在として描かれることによって、子どもたちの日常空間はそのまま空想の空間になっているのである。

おわりに

いたどり版からの改稿により、刊行版『いやいやえん』は、作品順序を一部変え、しげるを主人公とする物語として、長編としてのまとまりをもたせながら整えられた。「くじらとり」に憧れていたしげるは、「山のぼり」では一人での冒険を経験する。『いやいやえん』は、きかんぼうでやんちゃな個性そのままに成長していくしげるの物語である。

刊行版「くじらとり」は、くじらが人間味のある存在として描かれるようになったことにより、より豊かな物語性を持つようになった。さらに刊行版では、他の6話とは異なる点を持つ「やまのこぐちゃん」が追加された。その意味で、刊行版『いやいやえん』は、中川の作家としての出発点であるとともに、その後の作風の変化をも内包した作品である。『いやいやえん』以後の中川の作品は、「やまのこぐちゃん」の世界から発展していったように思われるが、その点については別の機会に改めて検討したい。

注

¹ 川端康成とともにNHK児童文学賞の審査委員の一人であった藤田圭雄は、1963年3月4日の日記に「NHK児童文学賞の審査会、青松寺境内の醍醐である。川端、久保田、竹山氏等。川端さんとぼくは『いやいやえん』を推す。」と記している（川端文学研究会（編）『川端文学への視界（機関誌年報No. 2）』教育出版センター 1986年 146頁）。また川端は野間児童文芸賞の選考委員も務めており、選評で『いやいやえん』について、「この賞の前に三つも賞を受けているが、幼稚園童話としてすぐれたものである。」とした（『川端康成文学全集』34巻 新潮社 1982年 383頁）。中川は、「川端康成さんなど、児童文学ではない方が褒めてくれたと語り（中川李枝子「子供の心を育む物語の世界」『初等教育資料』（938）2016年3月 40頁）、また「野間児童文芸奨励作品賞を受賞したのは、選考委員だった川端康成氏が、受賞させないのなら委員を辞めると推してくださったからだと聞きました。」と記している（中川李枝子『ママ、もっと自信をもって』日経BP社 2016年 83頁）。『いやいやえん』には批判もあり、中川にとって川端からの評価が大きなものであったことがうかがえる。

² 『いやいやえん』は、1963年に、第1回NHK児童文学奨励賞（3月）、第10回サンケイ児童出版文化賞（5月）、第5回児童福祉文化賞（通称厚生大臣賞、5月）、第1回野間児童文芸賞奨励作品賞（10月）を受賞している（『日本の児童図書賞 1947-1981年』東京子ども図書館 1982年、及び『NHK年鑑 '63』日本放送出版協会 1963年 113頁）。

³ 財団法人大阪国際児童文学館ホームページ [解題・書誌作成担当] 森井弘子
<http://www.iiclo.or.jp/100books/1946/htm/frame032.htm>（閲覧日2023年7月2日）

⁴ 船越美穂「中川李枝子」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大辞典』第2巻 大日本図書株式会社 1993年 11頁

⁵ 今江祥智「“シネラマ”と“魔法”」『日本読書新聞』1963年2月25日 5面

⁶ 神宮輝夫「子供心の優れた洞察 だが観察記録の域に止まる」『図書新聞』1963年3月30日 6面

⁷ 教育的、しつけ的であるかの観点として、例えば、小西正保は「よい子童話の変種」だとし、細谷建治はしげるのいたずらが「いつも《よい子》のイメージの中に終息させられているところにひっかかり、安藤美紀夫は「躰の構え」があるとす。佐野美津男は「一種のしつけ童話でありながら、すこしも教訓臭のないさわやかさにみちている」と肯定し、奥田継夫はしげるに「一見、アウトロウ、結局は

長いものにまかれる人間像」をみる。それぞれの教育観によって捉え方は異なると思われるが、一点だけ述べておくと、小西も細谷も佐野も第5話「おおかみ」に「手や顔をよごしてはいけませんよという方向」(細谷)を見ているが、しげるの顔や手が最初から綺麗であれば、おおかみにその場で食べられてしまっているのではないだろうか。しげるが汚いからこそ食べられないという前提をふまえずに論じることはできないと思われる。

小西正保「幼年童話私論」『日本児童文学』16(11)(169) 1970年11月 68-78頁

細谷建治「戦後児童文学にあらわれた幼児たち—『いやいやえん』と『ちいさいモモちゃん』の場合」『日本児童文学』19(6)(200) 1973年5月 44-49頁

安藤美紀夫「いやいやえん」『日本児童文学』25(2)(282) 1979年1月 186-187頁

佐野美津男『児童文学セミナー』季節社 1979年 164頁

奥田継夫『子どもの色、空の色』人文書院 1983年 15-20頁

⁸ 中川正文は、神沢利子と比較して、中川の『いやいやえん』と松谷みよ子の「モモちゃん」を「自然発生的な文学の世界」としている(中川正文『『くまの子ウーフ』』『中川正文著作撰』ミネルヴァ書房 2014年 441頁)。

⁹ 岡田純也『児童文学作家論(岡田純也著作選集2)』KTC中央出版 2005年 205頁

¹⁰ 万屋秀雄「中川李枝子の幼年童話について-初期作品を中心に」『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学』28(1) 1977年6月 31-52頁

¹¹ 斎藤次郎『行きて帰りし物語』日本エディタースクール出版部 2006年 35-52頁

山田吉郎「中川李枝子『山のぼり』論—幼年童話としての構造と子どもの読者の受容—」『鶴見大学紀要第3部保育・歯科衛生編』(56) 2019年3月 79-87頁

¹² 注5に同じ

¹³ 藤本芳則「中川李枝子『くじらとり』」大藤幹夫・藤本芳則『展望日本の幼年童話』双文社出版 2005年 145頁

¹⁴ 『麦』(発行所:「麦の会」、発行人:石井美子、編集責任:いぬいとみこ)と中川の関わりは、第7号(1956年2月)からである。巻頭で同人が16名に増加したことが紹介され、同人紹介欄には「大村李枝子」(中川の旧姓)の名前があり、「学生」と記載されている。同号には、短編「二百十日」(52-61頁)が掲載されている。おそらく、これが中川の初めての作品であろう。病院の学童室で暮らす子どもたちを描いた物語である。この後、養護施設を舞台にした「青空が見えるまで」が、第9号(1956年9月)、第10号(1957年2月)、第12号(1958年4月)に掲載されている(未完)。

¹⁵ 「いたどりシリーズ」第1号(1958年11月)同人雑記に、中川は、「麦」が解散した経緯や、一日も早く創作活動をはじめたい、との決意を記している。

¹⁶ 中川李枝子『本・子ども・絵本』文藝春秋(文春文庫) 2018年12月 179-180頁

¹⁷ タイトルは「いやいや園」で、「チューリップ保育園」と「くじらとり」掲載。挿絵はない。

¹⁸ 冒頭に短縮された「チューリップ保育園」があり、「いやいや園」1話が掲載されている。

¹⁹ 同号には、いぬいによる「いやいや園」評も掲載され、いぬいは、「文学以前だ」等の「批判の声が押しよせるであろうことは容易に想像できる」が、「十分紹介するに足るもの」だとした(いぬいとみこ「幼年文学における現実と空想の間—同人雑誌の作品をめぐる」『日本児童文学』5(7)(42) 日本児童文学者協会 1959年8月 61頁/再掲:日本児童文学者協会編『現代児童文学論集第2巻 現代児童文学の出発』日本図書センター 2007年 239頁)。

²⁰ 編者である石井桃子は、同書の解説に「幼い子どもの生活を描きながら、全然の生活童話でもなく、全然のファンタジーでもない、両方のとけあった、しかも、骨ぐみもあり、長さもある幼児のための童話が、じっさいに子どもたちと生活をともにしている人たちから生まれてくることは、たのしみである。」と記している(同書298頁)。

²¹ 「くじらのうち」は、しげるが横浜にあるくじらの家まで遊びに行く物語である。中川は、これが初めて『母の友』に発表した短編で、『いやいやえん』のしげるが主人公だと語っている(中川李枝子「普通で最先端の良識雑誌」『母の友』(700) 2011年9月 25頁)。「しげるのかさ」は、しげるが「きのう四つに」なったところで、誕生日にもらった黄色い傘をおばあちゃんに見せるために出かける物語である。「王様になったしげる」も、「しげるは、四つです。」と始まる。いずれの作品にも、チューリップ保育園は出てこない。

²² 「さちこちゃん」は、主人公がチューリップ保育園に通っていて、その帰り道での出来事になっている。「かえるのエルタ」にもチューリップ保育園が登場するが(連載第2回)、刊行版(福音館書店1964年)では削除されている。

²³ 文章表現上の修正については本稿では取り上げないが、いたどり版「チューリ

ップ保育園」の冒頭は、「チューリップ保育園の門は、せいがひくくて、よこにばかり、ふとっています。/それは、八人の子どもたちが、手をつないで、なかよく通れるくらいです。/もし、この門が、やせっぽちだったら、みんなは通るときに、おしあったり、とび出したり、後へおし出されたりして、けんかをすると、きまっています。/チューリップ保育園には子どもが三十人いて、その中の十二人は、ほしぐみ、十八人は、ばらぐみです。」と始まる。刊行版では挿絵でわかる箇所は省かれ、長い文を2つに分けてわかりやすくしていることが見てとれる。文章表現上の修正は全編にわたってある。

²⁴ 『いやいやえん』の人気に挿絵が大きく寄与しているであろうことは疑いないが、紙幅の都合上、本稿では取り上げない。刊行版にはいたどり版と同じ構図の挿絵も多いが、絵の巧さは格段に上がっている。

²⁵ 中川李枝子「石井桃子と私」中川李枝子他『石井桃子のことば』新潮社 2014年 110-111頁

²⁶ 中川正文『いやいやえん』—中川李枝子の出発』『日本児童文学』19(10)(204) 1973年8月 112頁/再掲:『中川正文著作撰』ミネルヴァ書房 2014年 430頁

²⁷ いやいやえん | 福音館書店 (fukuinkan.co.jp) (閲覧日 2023年7月2日)

²⁸ 藤本芳則は作品の配列順について、「いやいやえん」を「最後に置くことで、いやいやえんと対比でちゅーりっぷ保育園のよさがクローズアップされ、全体を締めくくることが可能になった、と読める」ことを指摘しているが、内容にまで踏み込んではいない(注13に同じ。143頁)。

²⁹ 今江祥智・中川李枝子・松岡享子「座談会 幼児・おはなし・絵本」『図書』(276) 1972年8月 16頁

³⁰ 注13に同じ。143頁

³¹ いたどり版「くじらとり」で、くじらが帰る場面は次の通りである。「ひろい海で、自由にそだったくじらは、きゅうくつなのが、一番、きらいでした。トラックが、くじらの前に止ると、くじらは、そっぽをむきました。/「ぼくたちと、いっしょに、保育園へ行こうよ。」/みんながいうと、くじらは、海の方へもどって、泳ぎ出しました。/「やっぱり、海がいいんだってさ。」/キャプテンは、くじらをつないでいたひもを、ほどきました。/くじらは、花わののった頭を、ちょっと、みんなの方にむけてから、さっさと、海へ帰ってしまいました。」(いたどり版17頁)

³² 中川正文は、みずみずしさが失われた原因について、内容表現とも一般化しようとした作家としての態度や姿勢とともに、「緻密すぎると思われるほどの」改稿をあげ、「個々の作品に同量の力をそそぎすぎ、『いやいやえん』を組みたてている短編のあいだに、緊張と弛緩のメリハリが殆ど姿を消してしまった」と指摘している(注26に同じ。437-438頁)。

³³ 宮崎駿は「くじらとり」を短編映画にした際に、「海になった教室が最後に教室に戻る際にはどうしたらいいのか」悩んだという(中川李枝子・宮崎駿「対談 子どもを『描く』ということ」『母の友』(733) 2014年6月 54頁)。

³⁴ 「山のぼり」に登場する鬼も、「くいしんぼう」という名前を持っているが、自己紹介の後も、作品中では「おに」のみである。

³⁵ こぐは「小さいくまの子ども」であり、挿絵でもしげるより小さく描かれている(67頁)。

³⁶ 例えば、グリム童話には、男の問いかけに箒が答えたりするような話(「名づけ親さん」KHM42)がある。おおかみの家が、森の奥の奥にあることも示唆的であろう。おおかみ自体も「赤ずきん」(KHM26)に登場する狼を思わせる。『グリム童話集』(金田鬼一訳 岩波文庫)は中川の子どもの頃からの愛読書であり、保育園の子どもたちにも話してやっていた(中川李枝子『子どもと読書—子どもはみんな本が好き—』第25回児童に対する図書館奉仕全国研究集会実行委員会(鹿児島県立図書館内)1991年 3頁)。

³⁷ 第5話「おおかみ」でも、しげるは泥遊びで「ぞうとらいおんまる」を作り、自分がきゃぷてんになっている(94頁)。

³⁸ 中川は、子どもへの最高の褒め言葉は、「よい子」でも「賢い子」でも「聞き分けのいい子」でもない、「子どもらしい子ども」だとする。「子どもらしい子ども」とは、「全身エネルギーのかたまり」で、「ひとりひとり個性がはっきりしていて、自分丸出しで、堂々と毎日を生きて」いて、大人から見ると「問題児」かもしれないが、だからこそ「かわいい」のだと述べている(中川李枝子『子どもはみんな問題児。』新潮社 2015年 6-7頁)。

³⁹ 中川は『いやいやえん』各話の着想についてたびたび語っている(中川李枝子『子どもと共に』富山県民生涯学習カレッジ 2003年 41-46頁、等)。

⁴⁰ 注9に同じ。

⁴¹ 中川正文は、「教育的」「しつけ的」という批判への反論として、中川が当時どのような保育をしていたのかを取り上げている(注26に同じ。434頁)。神宮輝夫の「観察記録」(注6)という言葉もあるよ

うに、作者が保育園に勤務していたこと、及び子どもがリアルに描かれていることから、勤務していた保育園での「現実」と物語が曖昧にされたままで論じられてきたように思われる。中川自身が、『いやいやえん』を「自分の保育理論でもあった」（神宮輝夫『現代児童文学作家対談3 角野栄子・立原えりか・中川李枝子』偕成社 1988年 183頁）と語ってきた影響もあるだろう。